みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

中央アンデスのチャンカイ文化と天野博物館について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 龍彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004622

中央アンデスのチャンカイ文化と天野博物館について

藤　井　龍　彦*

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．天野博物館創設の経緯
Ⅲ．施　設
Ⅳ．展　示
Ⅴ．収蔵品
Ⅵ．研究活動その他
Ⅶ．おわりに

Ⅰ．はじめに

1874年の Reiss と Stübel によるアンコン Ancon 貝塚の発掘に始まる中央アンデス先スペイン文化の研究は，すでに100年以上の歴史を持っている。最近も各国の学者による着実な調査，研究が進み，前12000年から16世紀前半のインカ帝国期にまでわたる，この地域の長い先スペイン文化史が次つぎと明かにされつつある。しかしながら，過去の調査，研究の主力は，この地域の文明形成期である前1000年紀のチャビン Chavín 文化，あるいは美しい土器，織物，石彫を遺したパラカス Paracas，ナスカ Nazca，モチカ Mochica，ティアワナコ Tiahuanaco，チムー Chimú，インカなどの文化を中心として進められる一方，ペルー北海岸のビルー Virú 川流域，南海岸のイカ Ica 川流域，北高地のワヌコ Huánuco 地域などにおける層位的発掘による編年の確立に力が注がれて来た。その結果，現在のところ中央アンデスの主な地域においては，一応の編年がたてられるところにまで達している。一方，これら各地域の文化を横につなぐものとして，従来さまざまな時代区分法が提唱されて来たが，現在では J. H. Rowe による Horizon という概念を取入れた方法が多くの研究者により使われている。

ところで，このように一応の枠組みが出来た中央アンデス先スペイン文化研究であるが，その中のおのおのの文化の成立，発展の経過，あるいはその内容に関しては，前述の古くから調査，研究されている文化に関してといえども未だに充分なデータが得られているとは決していえない。そこで，今後の研究はその方向に向けて進められるべきことはもちろんであるが，他方，従来あまり調査，研究の対象とならなかった文化にも目を向けて行く必要があろう。

* 国立民族学博物館第4研究部

ペルーの首都リマ市の北約 60 km のチャンカイ Chancay 川流域を中心に，インカ帝国が全中央アンデスを征服した直前に栄えていたチャンカイ文化も，従来あまり研究の対象として重視されていなかった文化の一つである。この文化は，白地黒彩の土器で古くから知られてはいた。しかし，多様な象形土器を持つモチカ文化，多彩色の美しい土器を作ったナスカ文化などに比べ，あまりにも素朴であるためあまり注目されず，研究の対象にもならなかった。チャンカイ文化が広く知られるようになったのは，ひとえにリマ市在住の天野芳太郎氏の積年の努力による。若い頃からアメリカの古代文化に興味を持っていた天野氏は，1951年ペルーに来ると同時に，チャンカイ川流域の遺跡群に注目し，現在までに数万点にのぼる資料を収集している。これらの資料は独力で創設した博物館に収められ，一般に公開されている。収蔵品の中でも特に，チャンカイ文化の染織品は質，量ともに世界第一級のものとして知られている。染織品以外にも，多数の土器，土偶その他の土製品，金属器，石器，骨角貝器，木器などの道具類や装飾品の他，頭骨を主とした人骨，動物や植物などの自然遺物にまでわたる多くの資料が収蔵されている。

筆者は，第4次東京大学アンデス地帯学術調査団員として，1966年に初めて天野博物館を訪れて以来，今回で6度目の訪問になるが，その度にこれらの貴重な資料に強く引きつけられ，いずれチャンカイ文化の詳しい調査を行いたいという希望を持っていた。幸い，昭和51年度文部省科学研究費補助金（海外学術調査）による，京都大学工学部上田研究室の「南米都市における戸外空間調査団」の一員として，リマ市に滞在する機会が得られた。本稿は天野博物館における調査結果を主として，博物館の紹介という形をとった。いずれチャンカイ川流域その他の現地調査を含めた，チャンカイ文化に関する調査を行うつもりである。本稿はそのための予備調査の報告として書かれたものである。

今回の調査にあたり，多忙な中を貴重な資料，データを提供して頂いた天野博物館長の天野芳太郎氏その他館員諸氏，またこの調査の機会を作って頂いた京都大学工学部の上田篤助教授，国立民族学博物館の梅棹忠夫館長，本稿作成の上で種々の御示唆を頂いた同館の伊藤教授に厚くお礼を申し述べる。なお，収蔵品の写真 Ia～VIc は，カメラマンの山本正勝氏撮影のものである。記して感謝の意を表する。

Ⅱ．天野博物館創設の経緯

天野博物館の創設者であり現館長である天野芳太郎氏は，1898年7月2日に生れ本年78才になる。1969年に脳血栓で倒れて以来しばらく静養していたが，持前の不屈の意志で摂生に努め，最近はすっかり元気になり長年の研究テーマであるチャンカイ文化および，中央アンデス諸文化の文様の研究に励み，一方，連日訪れる見学者に自から陳列品の解説をしている。また，週末を利用してしばしばチャンカイ方面へ現

地調査に赴き，時には遠く南海岸のナスカ川流域へ，あるいは中部海岸のワルメイ Huarmey 川流域にまで調査の足を延ばしている。天野氏と考古学との出会いは，12才の時当時住んでいた函館の近くで採集した先土器時代の黒曜石の石槍に始まる。その石槍が4000年以上も前のものであることを知った時の驚きと満足感は，今でもはっきりと思い出すといい，石槍は天野コレクションの一つとして現在も手元に置かれている。1928年中米のパナマに渡り，同地にて百貨店を経営したのを始めとし，一国一事業を目的にアメリカ合衆国，コスタリカ，エクアドル，ペルー，チリで幅広い経済活動を行っていた。多忙な事業のかたわら各地を旅行し，日本では当時あまり知られていなかった新大陸各地の先スペイン文化の遺物のすばらしさに感動し，収集を開始した。収集品は中米を中心に，北はメキシコから南はチリにまでわたる各地の遺物数千点に達し，パナマ市の自宅の1階を陳列室にして公開していた。同時に，強い記憶力に支えられた豊富な学識とあくなき探究心を持って，中南米文化の研究を行い，数冊の著書を刊行し，また各地で講演を行った［天野　1936, 1940a, 1940b］。しかし，太平洋戦争開戦と同時にアメリカ合衆国に抑留され，そのコレクションや数千冊の蔵書をはじめ，すべての財産を没収されてしまった。1943年交換船で帰国したが，その後も外務省に勤めるかたわら，活発に中南米の古代，現代文化に関する本を著した［天野　1943a, 1943b, 1943c, 1943d, 1943e, 1944, 1948］。終戦後再び渡米し，ペルーを中心に裸一貫から事業を再開した。戦前はペルーで金融業を営んでいたが，1951年に再びペルーに落着くと同時に，当地の豊富な漁業資源に目をつけ，その仕事をする場所を探すかたわら，広く海岸地帯を歩いてインカ，先インカの遺跡を見てまわった。その間に，リマ市の北約 60 km のチャンカイ川流域の遺跡に注目し，同地の出土品を中心とした収集を開始した。

中央アンデス先スペイン文化には，前述のようにチャビン，モチカ，ナスカなど美しい土器や織物，石彫を遺した文化が数多くあるため，白地黒彩の素朴な土器を作ったチャンカイ文化には，当時何人も注目していなかった。天野氏自身にしても，初めてチャンカイを訪れ村人の持っていた美しい布を見た時，それがあの素朴な土器と同時代のものとはとても信じられなかったという。しかし，実際に遺跡に行き散乱する人骨の間にそれと同じ布片があるのを見て驚き，即座にこの地域を中心にコレクションを行うことを決心した。戦前のパナマ時代には，前述のように広い地域の遺物を収集していたが，個人の力では限りがあることに気付き，また『まず一つの地域を集中して調べ，そこの遺物を集めることが大事だ，つまり個に徹すれば普遍に通ずという精神』［天野　1975］に従って，毎週末にはチャンカイ川流域に散在する多くの遺跡をめぐり，盗掘により荒らされた遺跡から，捨てられた土器や染織品を拾い集めた。

海岸の砂漠に営まれた墓地の副葬品であったこれらの遺物は，塩分を多く含んでいる。そのため発掘したまま放っておくと，染織品はもちろん土器すらも表面からボロボロと崩れてしまう。それを防ぐためには，出土後直ちに，塩分を取除く根気のいる

作業をしなければならない。土器，土製品は通常水道の蛇口を細く出し放しにした流水の中に4～5日浸しておくだけで良いので，比較的簡単である。しかし染織品の方は大変である。特に撚りの弱い木綿の薄物類は，その処理に万全の注意を要する。また，ものによっては水洗いすると変色したり色がなくなってしまう場合があり，その時は予めその一部を水につけて試してみる必要がある。仮に変色したときには，固くしぼった布で何度も静かに上から押えて塩抜きをしなければならない。羽毛製品，縫いぐるみの人形などは水洗不可能であり，単に何度も軽くたたいてホコリと塩分を出す以外に方法はない。織物の糸は，木綿とアルパカ alpaca という新大陸のラクダ科動物の毛が主であるが，糸の撚り，織り，染めは各種各様で，その処理にはきわめて繊細な注意が必要であり，また根気のいる仕事である。

塩抜き，水洗，乾燥の終ったあと，染織品類はラシャ紙の台紙に1点ずつ縫いつけ，すべての出土品には出土日時，出土場所その他のデータが記入されて整理されていった。最初は自宅の一室を収蔵庫にあてていたが，そのコレクションが口伝えに評判を呼び，ペルー人はもちろん，外国からも研究者が訪れるようになり，コレクションの量も増えて年ねん手狭になって来た。一方天野氏も，パナマで挫折した博物館創設の夢を実現すべく，自身で発掘する以外にも多くの土器，染織品などを購入し，コレクションの内容を充実させていった。1962年，自宅の一軒おいて隣りの敷地を購入し，翌年博物館の建設を開始した。1964年7月には，ペルー国文部省令の博物館法による機関としてその資格が認められ，同年8月開館を迎えたのである。

本年で開館以来13年になる天野博物館は，開館時の2階建が3階建になり，コレクションの内容も年毎に充実し連日多くの見学者を迎え入れている。1972年には，従来の天野氏の私財による経営から，財団法人天野博物館に改組し，天野氏は土地，建物，収蔵品その他のいっさいを財団に寄贈した。それと同時にすべての経済活動から身を引き，現在は調査，研究，資料の収集に専念している。財団化により本館が永遠に存続することが法的に可能になり，同時にその活動を財政的に裏付けるための後援会も発足し，現在ペルー，日本両国で活発に募金活動が行われている。

ところで，本館の入館料は無料であるが，誰でも自由に入れる完全な一般公開ではなく，後述のようにむしろ個人のコレクションを希望者に見せるという形に近い公開方法をとっている。しかし，この方針は決して館が閉鎖的な態度をとっているということではなく，次のような天野氏の考えによるものである。すなわち，ペルー国の歴史的民族遺産を，外国人である同氏が有料で公開することに抵抗をおぼえること。日本人の海外活動は，主として経済面では評価されているが，文化面では立ち遅れている。そこで本館の活動は経済とは離れた文化事業であることを明かにするため，無料公開する方が良いこと。後の展示の章でも述べるように，本館独特の展示方法をとっているため，無制限に一般公開することは不可能なこと，などである。見学希望者は，

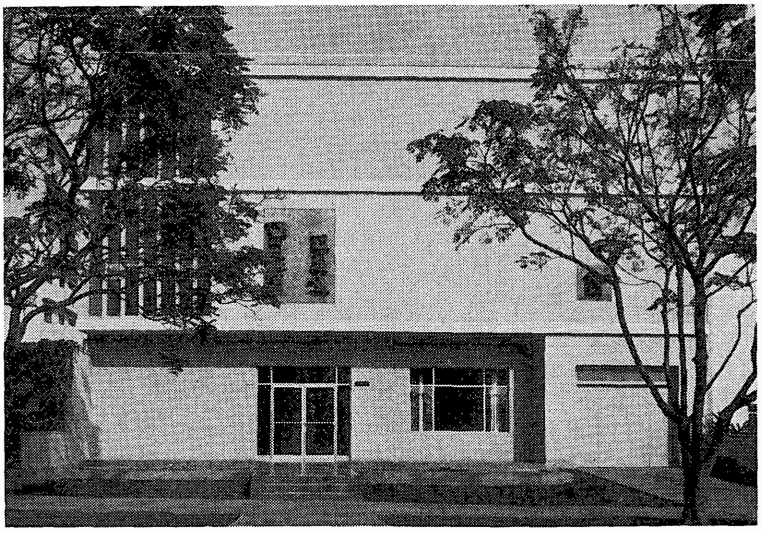
あらかじめ月曜から金曜の午後2時から5時までの間の，希望の時間を約束しておく必要がある。また各回の見学者の人数は多くても10人ぐらいに限られている。見学者には，かならず玄関ホールの記名簿に日付け，住所，氏名，職業，国籍，見学の印象などを記入してもらっている。

1975年の来館者は，50カ国より5,880人にのぼっている。また，1976年8月には28カ国，814人を数える。7，8月および1，2月は休暇シーズンのため特に数が多いということはあるが，少ない月でも300人を下ることはない。1975年の5,880人の中，2,519人は日本人でやはり一番多く，次いでペルー人978人，アメリカ人598人，フランス人283人，アルゼンチン人275人，ドイツ人258人と続く。以下，ヨーロッパ，中南米，オセアニアからは，38カ国の人びとが来館しているが，アジア，中近東，アフリカからは，イスラエル，トルコ，韓国，インド，南ア連邦，ローデシアの6カ国16人ときわめて少ない。日本人は，各種の中南米視察団や団体旅行のグループが多い。また，大使館をはじめ当地に進出している日系企業は，日本からの来客をかならずといってよいほど本館に案内して来る。しかし，最近は天野博物館見学を主な目的の一つとして，はるばるやって来る人たちも増えて来ている。

職員は，現在館長の天野氏の他に，事務，資料整理，陳列品の説明などに3人，天野氏の文様研究の助手その他の研究室関係に1人，運転手，大工，館内清掃その他の仕事に2人の計6人が働いている。

Ⅲ．施　　設

天野博物館は，リマ市南部の閑静な住宅街であるミラフローレス区レティロ街160



写　真　1

番 (Calle Retiro 160, Miraflores, Lima, Perú) にある（写真1）。館の敷地は，間口 18 m，奥行 35 m で，面積は 630 m² である。本館は1964年の創設時には2階建であったが，その後1965年に3階の研究室と第1収蔵展示室が，1970年に第2収蔵展示室が増設され現在の姿となった。街路に面した本館と庭をはさんで，奥に面積 76 m² の小住宅が付設されている（図1）。二つの建物はいずれも鉄筋コンクリートおよび煉瓦造りで，設計は天野氏自身による。建物正面ファサードの，一見漢字を文様化したように見える装飾は，京都の陶工安田氏の寄贈による陶板装飾である。

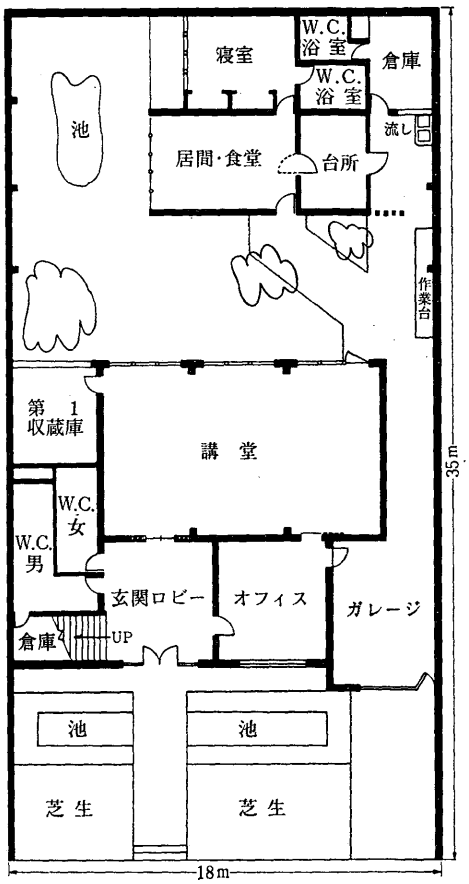
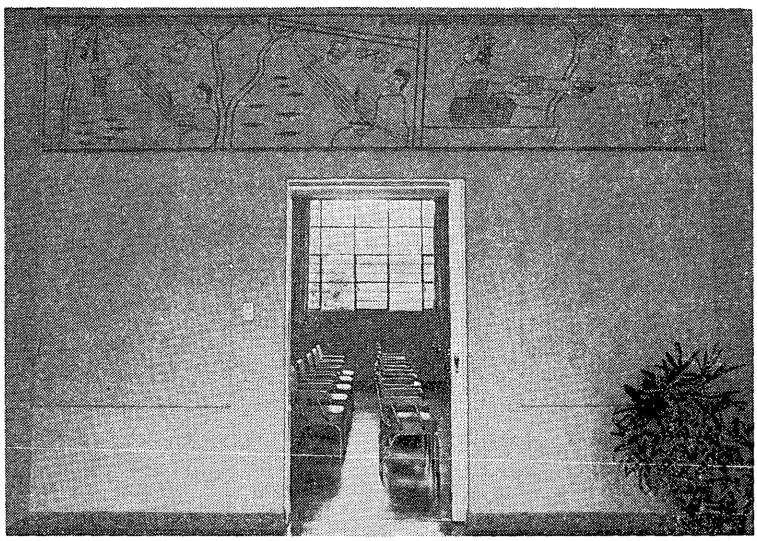


図1　天野博物館の敷地，建物配置及び1階平面図

街路に続いて芝生と水蓮の浮ぶ池があり，それをまたいで幅広い通路が玄関へ通じている。1階は面積 225 m²，玄関ロビー，事務室，講堂，第1収蔵庫，倉庫，洗面所およびガレージからなる。玄関ロビーは，見学者記名簿と植木鉢が一つ置かれただけの簡素なものであり，正面の講堂入口の上は，モチカ文化の土器文様からとった機織りの場面の図で飾られている(写真2)。ホール右手の事務室には，三つの事務机，電話，タイプライター，館内連絡用インターフォンなどが備えられ，館員により見学者の受付けその他の事務が行われている。奥の講堂は広さ 80.5 m²，50脚の椅子，映写装置，黒板が備えられている。ここでは，天野氏の他，当地を訪れた学者を招いての講演会などが開かれる。第1収蔵庫は，広さ 14 m² で主としてチャンカイ文化の土器が収蔵されている他，約100点の頭骨，模造品の土器などがある。

2階には，二つの展示室と収蔵庫がある（図2）。第1展示室（写真3）は，面積 99 m² で土器，木器，装飾品，楽器が展示されている。第2展示室（写真4）はやや狭く 79 m² の大きさで，染織品を中心として，木製の輿の背板，羽毛細工，墓からミイラと共に出土した副葬品のセット，金属細工その他の小型装飾品などが展示さ



写 真 2

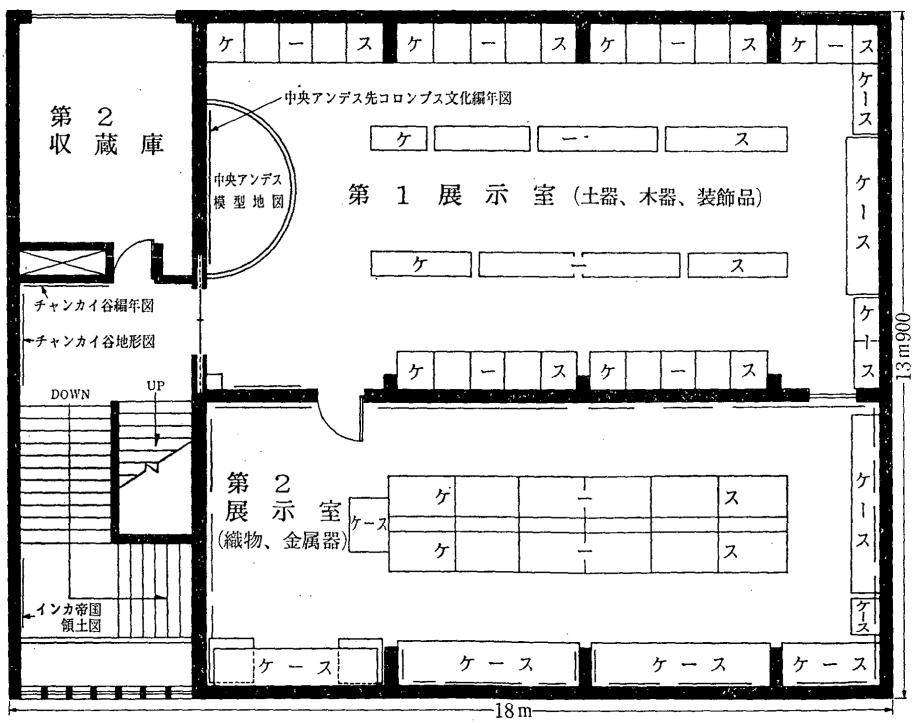
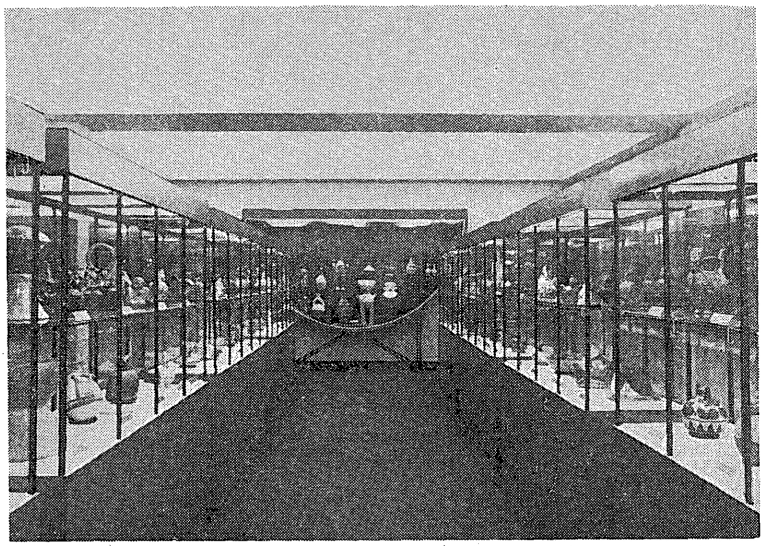
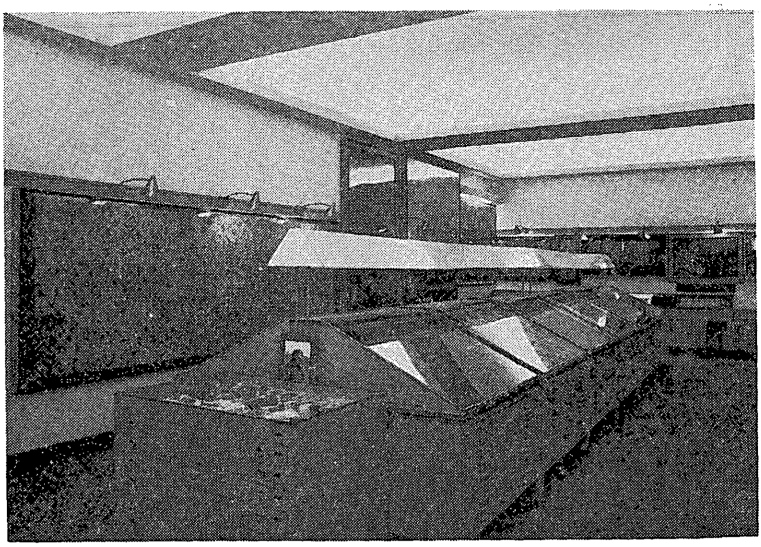


図2　2階平面図および展示室ケース配置図



写　真　3

れている。この二つの展示室にはまったく窓がない。採光はすべて螢光灯と白熱灯による人工光線を使用しており，見学者がない時は完全に真暗になる。また，保存の面できわめてデリケートな注意を必要とする染織品のために，第2展示室には強力な除湿機が備えられ，リマ市の時には100％に達する高い湿気から貴重な資料を守っている。展示室の手前に広さ約 16 m^2 の第2収蔵庫があり，壁沿いとその間に二つの計



写　真　4

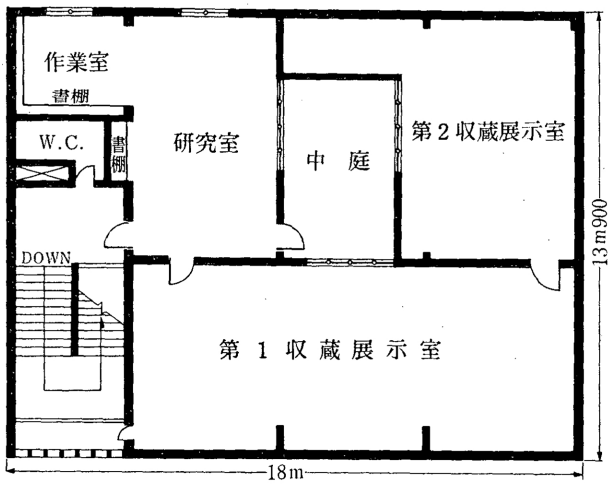
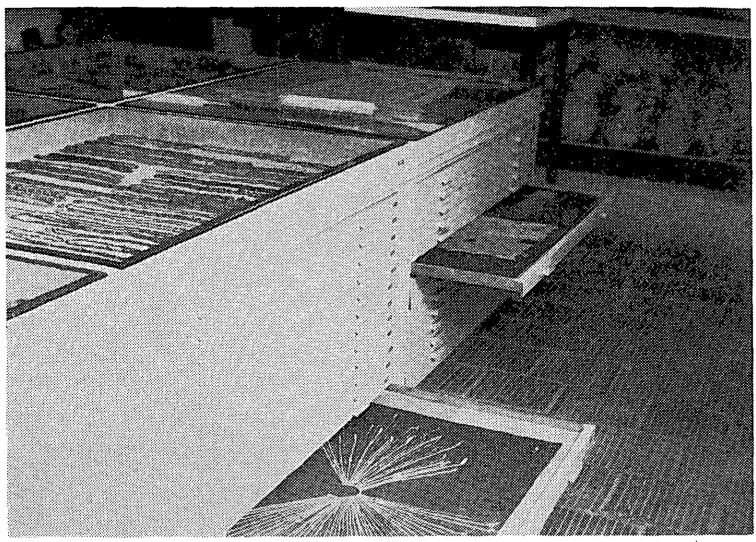


図3　3階平面図
縮尺　1/100

四つの棚には，1,000点を越す土器が時代別，テーマ別にきちんと整理して並べられている。

3階は，研究室兼図書室兼作業室，第1，第2の二つの収蔵展示室，洗面所と中庭からなる（図3）。研究室は約 45 m^2 の大きさで，館長の天野氏をはじめ，館員の森岡，阪根両氏が資料の研究，整理に当っている（写真5）。また，本館の収蔵品を研究するために来館する研究者，あるいはここに場所を借りてこの地域のさまざまな研究をする学者のための場ともなっている。昨年も，7，8月には古代灌漑水路の研究

写　真　5



写 真 6

者である関西学院大学教授の亀田隆之氏が，8，9月には当地の織物の研究をしている石原繁野嬢がそれぞれ机を借りて研究を行い，また8月から10月にかけては，東大教養学部文化人類学教室の加藤泰建助手と筆者の二人が，一昨年発掘したラ・パンパ La Pampa 遺跡出土遺物の整理のため，その一隅を借用していた。この部屋には，その他に書棚，資料保管庫，資料カード整理箱などが置かれており，電話と館内連絡用インターフォンが備えられている。第1収蔵展示室（写真6）は，面積約 80 m^2 である。壁沿いの戸棚およびケースには，主としてチャンカイ川流域出土の完形土器類がある。中央の平ケースには，土器や土製品製作用の型，笛，櫛，石器，金属器，投石用紐，頭巻きの細帯，入墨されたミイラの腕，織物の機などが並べられ，その下の何段もの引出しには多くの染織品が収蔵されている。天野氏が各地で採集した土器片類も，きちんとデータが記入されて引出しに収められている。第2収蔵展示室（写真7）は，広さ約 47 m^2 のL字型の部屋で，形成期のパラカス文化に属する美しい織物をはじめ，大きな染色品の類が木枠に入れられて収蔵展示されている。また，この部屋は窓がなく完全に暗くなるため，ライティングを必要とする写真撮影のスタジオとしても使用されている。

博物館の裏庭には，出土品を処理するための流し，作業台が設けられている（写真8）。作業台は，染織品を水洗，乾燥するために特に天野氏が考案して作られたコンクリート製のもので，手前の縁がやや高くなっており浅く水がたまるようになっている。そこに水をじょじょに流しながら丸まった状態で出土した染織品を広げ，水洗，塩抜き作業を行う。また，開館時には庭の一部にペルー特産の植物，特に有用植物で

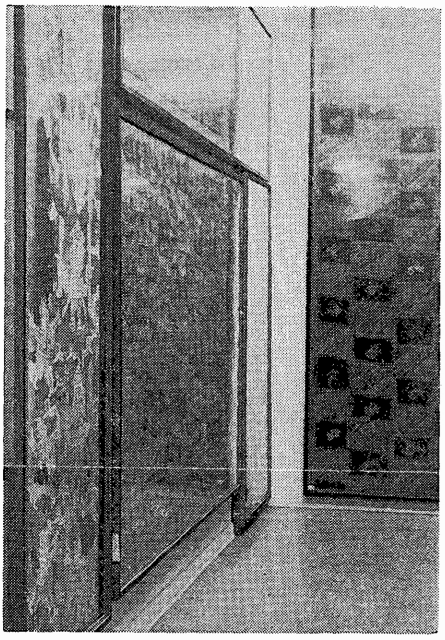


写真 7

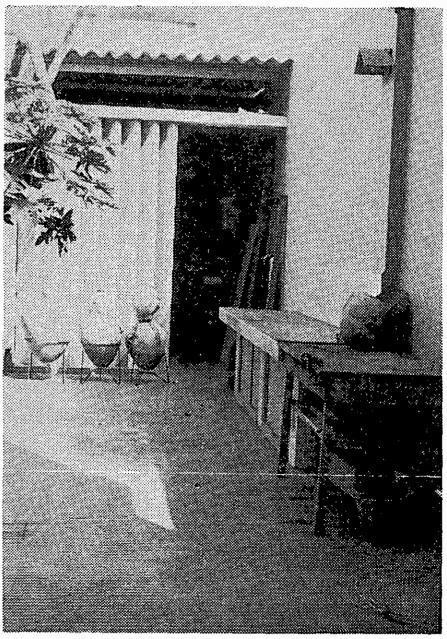


写真 8

あるトウモロコシ，ジャガイモ，トマト，トウガラシ，ユカ（キャッサバ），パパヤ，パルタ（アボカド），アチョテ，アガベなど23種類にものぼる植物が植えられていたが，天野氏が病に倒れて以来手入れが行き届かず，その数が少なくなってしまったのは残念なことである。

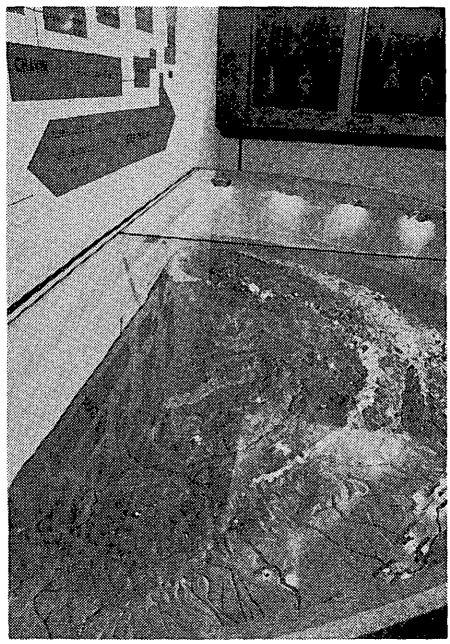
このように，天野博物館は小規模ながらも博物館としての必要な施設がほぼ整っている点，実にすばらしいものであるが，天野氏の見込み違いの一つは，収蔵品が現在のように多数になるとは予想していなかったため，収蔵庫の面積を充分にとっておかなかったことである。収蔵庫に収まりきれなくなった資料は，現在ガレージ奥の通路や裏の住宅の屋上に箱詰めにされて置かれている。

Ⅳ．展　　示

前章の施設でも述べたように，天野博物館の展示室は二つの部屋を合せて 178 m^2 にしかすぎない。一方，対象となる中央アンデス文化は，紀元前2000年紀から16世紀のインカ文明までの3000年以上にもわたり，地域も現在のペルー，ボリビアを含む広大な地域に栄えたものである。そのためそのすべてを万遍なく扱うためには，膨大な展示室と収集のための莫大な費用が必要である。この問題を解決するため，天野博物館では独特の展示構成をとっている。

その一つは，陳列品を見る前に地図や年表を使って見学者にある程度の予備知識を与えることである。これは他の博物館，展覧会などでも一般的に行われていることであるが，通常は図や表があるだけで見学者はほとんど素通りするか，ちらっと見るだけにすぎない。本館では，後にも述べるようにかならず解説者がつくため，これらが効果を持ってくる。玄関ロビーから上った最初の踊り場には，南北 4000 km に達したインカ帝国の版図が掲げられ，中央アンデス文明の頂点としてのインカ文明の広がり，その偉大さが語られる。2階の展示室前の踊り場には，本館収蔵品の主力をなすチャンカイ川流域の遺跡地図，および同地の文化史年表が出土した土器の図入りで示されている。

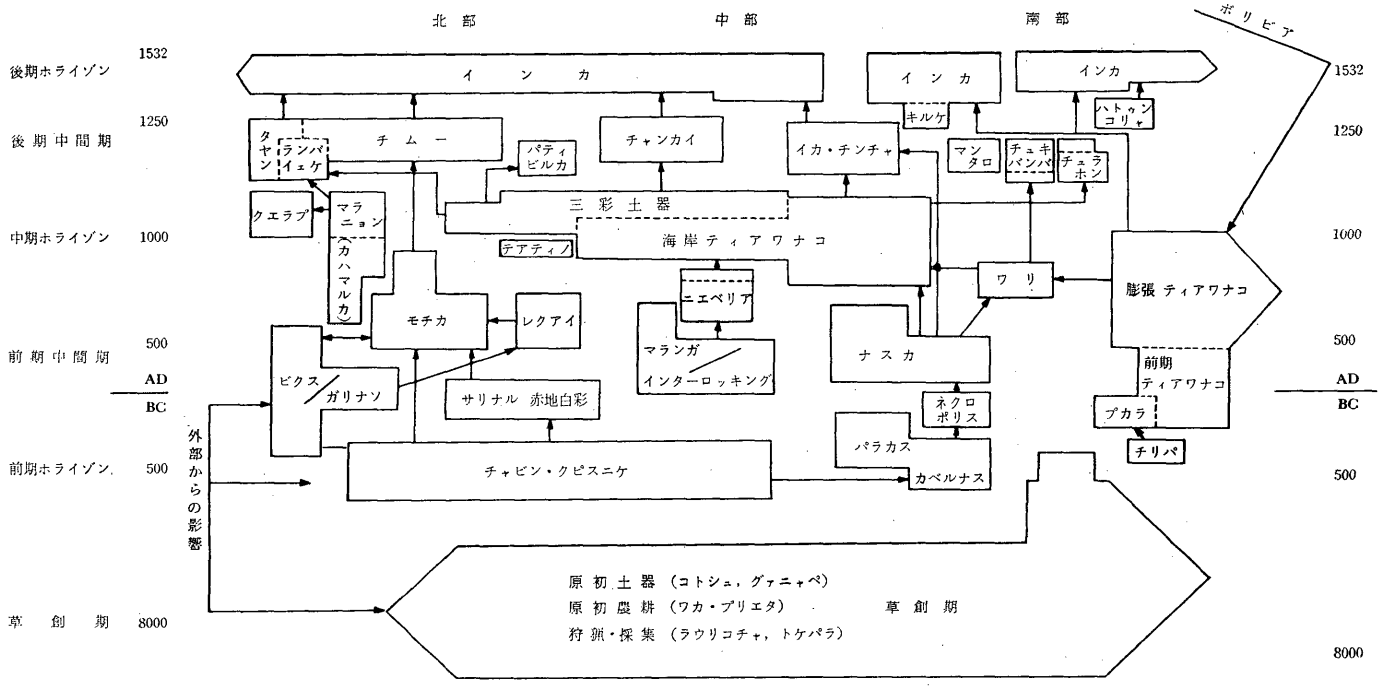
第1展示室に入ると，まず大きな半円形の中央アンデス地帯の立体地図が置かれている（写真9）。この地図をみることにより，海岸沿いの砂漠，そこを横切って流れる川沿いのオアシス，海岸からすぐにそそり立つアンデス山脈，その間をぬって流れるアマゾン源流のいくつかの川，3000 m 前後の山間の盆地，山脈の東側に広がる低地熱帯雨林地帯という，中央アンデスの地理的環境がよく理解できる。また，この地図上に主要遺跡の位置を豆電球で示し，スイッチの操作により各時期毎の遺跡の位置，分布が一目で判るようになっている。豆電球には色がついており，その色は背後の壁にかけられた中央アンデス先スペイン文化史年表に示された。各時期の色と一致しており，見学者は各遺跡の年代，属する文化などを簡単に知ることができる。



写 真 9

ここで，中央アンデス地帯の先スペイン文化史について簡略に触れておこう（表1）。現在までに判明しているデータによれば，この地域最古の人類の足跡は前12000年にまで遡る。初期はもちろん狩猟，採集経済の段階であったが，前2000年紀に入ると，北高地のコトシュ Kotosh，中央海岸のエル・パライソ El paraíso などで，神殿と思われる公共建造物を中心とした定住生活が営まれるようになり，やがて土器作製，トウモロコシ農耕も開始され，いわゆる草創期といわれる段階になる。前1000年紀前半には，チャビン文化とよばれる猫科動物崇拝を主体とした，きわめて宗教色の強い文化が中央アンデスのかなり広い地域に広がり，前期ホライゾンとよばれる時期

表1　中央アンデス地帯先スペイン文化編年表　(Horkheimer 氏の資料による)



になる。チャビン文化は前1000年紀後半にはその影響力を失い，北海岸のビクス Vicús，サリナル Salinar，ガリナソ Gallinazo，モチカ，北高地のカハマルカ Cajamarca，レクアイ Recuay，中部海岸のナスカ，南高地のプカラ Pucará，ティアワナコなど，各地に地方色豊かな文化が生れた前期中間期になる。その後，紀元600年頃に，中部高地のワリ Huari 文化が勢力を強め，再び中央アンデス地帯を広く影響下に置き中期ホライゾンを形成する。ワリ文化も1000年頃勢力を失い，後期中間期に入ると北海岸のチムー，中央海岸のチャンカイ，南海岸のイカ・チンチャ Chincha などの地方文化が栄える。最後に，南高地のクスコ Cuzco を中心に勢力を拡大して来たインカ族が，1467年チムー王国を征服し，全中央アンデス地帯がインカ帝国の支配下に入る後期ホライゾンが来る。

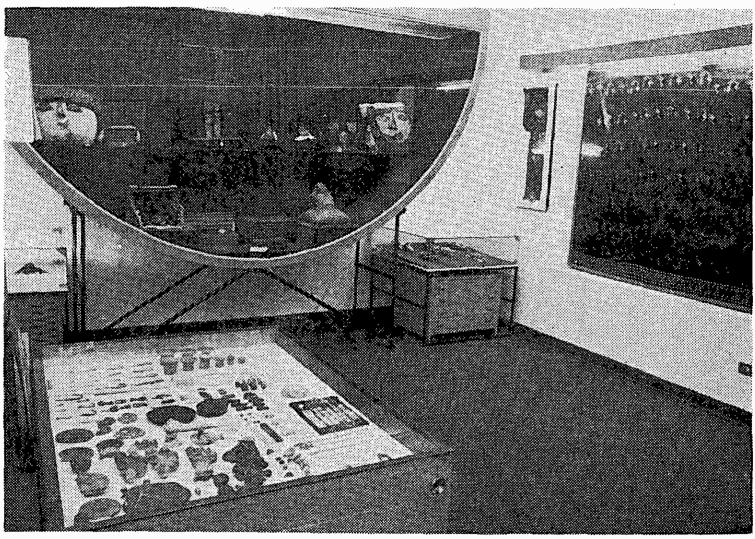
以上のように，長期かつ地方色豊かな中央アンデス先スペイン文化を扱うために，本館では少ないスペースを有効に利用した展示構成がとられている。第1展示室ではまず最初に，壁沿いのケースを使って前1200年のコトシュから16世紀のインカさらには征服直後の植民地時代初期にまでわたる各文化の土器を年代順に展示している。これにより，それぞれの文化の特色が理解されると共に，3000年にわたるこの地域の文化の流れも示されている。その後で，中央に二列並んだケースに移る。最初に，トウモロコシ，ジャガイモ，トウガラシなど新大陸原産の有用植物を表した土器を並べ，現代の人類がいかにこれらの植物の恩恵をこうむっているかを示す。次いで，魚，貝，エビ，漁師などの水産関係の土器，鳥を表した土器のグループがある。1列目の最後には，病人，死者，戦首級，ラグビーボール形土器，3匹の熊が手をつないで踊っている土器などの珍しいものが並ぶ。2列目では，前期中間期のモチカ，ナスカ両文化の細分化された土器型式を見せ，一つの文化でもこのように細かく分かれることを示す。また，モチカ文化の単彩，象型，写実性と，ナスカ文化の多彩，平面，象徴性を比較することにより，同じ時代でも 1000 km 隔たった北と南では，いかに異なった文化が発展していたかを示し，中央アンデス文化の多様性を認識させるという考えられた構成がとられている。その後に，笛，太鼓，鈴などの楽器，それらを演奏している人物像を表した土器があり，最後には，金，銀，玉，羽毛で作られた美しい首飾りが展示されている。その他，第2展示室への扉の近くには，掘棒，パンをかまどから取り出す時に使う棒，棍棒などの木器類，大きなワリ文化の織物がかけられ，また部屋の隅にはチャビン文化の見事に磨かれた石製容器が置かれている。

第2展示室は前述のように染織品が主であり，比較的地味な土器の部屋に比べ，華やかな色彩の世界である。そのほとんどがチャンカイ文化に属するため，この部屋では文化別の構成をとらず，主として技法別に分けた展示が行われている。染織品の中の大きなものは，部屋の二方の壁に木枠に入れ上を透明のポリエチレンフィルムで覆って掛けられている。残りの二方の壁際および部屋の中央には，角度のついた平ケー

スがおかれ，その上にガラスで覆った布類が展示されている。壁沿いのケースの上にも，比較的小さな染織品が掛けられている。また，すべてのケースの下には何段もの薄い引出しがあり，その中にも一枚一枚台紙にとめられた数多くの染織品が収められている。これら大小さまざまの染織品により，中央アンデス文化の染織品の用途，紡ぎ，織り，染めなどの技術水準の高さが示されている。

この部屋の一角には，織物の外に木製の輿の背当てがある。その前には，同じチャンカイ出土の輿に乗った小さな土製の人物像が置かれ，これがどのように使われたかを示すという行き届いた展示法がとられている。その他，入口正面の半月形の大ケースの中には，死者と共に埋葬されたものにどのようなものがあるかという例として，偽頭，計り，織りかけの機，人形，木製あるいは草を編んだ裁縫箱，帽子，羽飾り，戦闘用のヘルメットなどが展示されている（写真10）。その両脇のガラスケースの中には，縫いぐるみ人形，羽毛の頭飾りが収められている。写真10の手前にみえる小さな平ケースの中に，釣針，耳飾り，毛抜き，留めピン，鈴，ペンダントその他の金属製品，貝の透かし彫りやモザイク製品，黒玉製の鏡，貝，石，土製の小型装飾品などが展示されている。

以上述べたように，天野博物館は小規模な私立博物館であるという点を巧みに生かして，通常の博物館ではあまり見られない展示構成をとっている。しかし，いくら展示構成が巧みであっても，単に展示品を並べておくだけでは見学者はそれぞれの品物の持つ意味を充分に汲み取ることはできない。かといって，パネルにぎっしりと細かい説明を書いたところで，それを読むためには相当の努力を要する。天野博物館では，



写　真　10